

近松の俊寛像

二十八回生 榎本成子

目次

序 本論

第一章 先行作品に於ける俊寛像

第一節 「平家物語」の俊寛

第二節 「源平盛衰記」の俊寛

第三節 謡曲「俊寛」

第二章 近松の俊寛像

第一節 「平家女護嶋」の構成(略)

第二節 近松の俊寛像

結び

序

『平家女護嶋』は享保四年、近松六十七歳の円熟期に書かれた作品である。主として『平家物語』に取材している点、興味ある作品だが、中でも特に興味深く感じられるのは第二段目切、鬼界が嶋の段であると思う。本作で所作する人物が先行作品と比較し類型的であるのに比べ、第二段に登場する人物は新鮮であり、又、二の段が従来とは異なつた趣きを持って作り変えられているからである。特に第二段の主人公俊寛には近松独特のものが見受けられる。そ

こで本論では俊寛に焦点を置き、各種先行作品を背景として、近松はどのように俊寛像に変化を持たせていったのかを考察することにした。そしてそれを通して、近松の人間性に触れてゆきたいと思う。

第一章 先行作品に於ける俊寛像

先行作品として『平家物語』『源平盛衰記』謡曲『俊寛』の三作品を扱う。

第一節 「平家物語」の俊寛

平家の権勢と専横を憎む後白河上皇を中心とする謀議に、鹿ヶ谷の山荘を提供した罪により、法勝寺執行俊寛は平判官康頼・丹波少将成経の二名と共に、薩摩国鬼界島へ配流される。翌年、清盛女中宮安産の為の大赦が行なわれ、康頼・成経は帰洛が叶うが、俊寛は一人清盛の怒りが解けず島に取り残される。後、主の行方を案じ島に下つた従者有王にみとられながら、俊寛は悲惨な晩年を閉じる。

以上が俊寛物語と呼ばれるものの大略だが、彼が主として登場するのは赦免使の到着を境とする後半部分、「足摺」「有王が島下り」の両段である。それ以前に於いて彼を表

現するのは、次の二、三の断片的記事だけである。

かかる恐しき人の孫なればにや、此の俊寛も、僧なれども、心も猛く傲れる人にて、

(巻一・鶴川合戦)

天性此の俊寛は、不信第一の人にて

(巻二・康頼祝)

前者は鹿ヶ谷事件参画の因として、彼者は康頼・成経の篤信であるのに対し、熊野権現を信仰しない理由として掲げられているものである。

このように俊寛は、前半では極めて断片的だが、清盛に通じるところの猛々しさを持つ者として否定的批判的に描かれている。又、これは猛き者の滅びをテーマとする『平家物語』にあつては、後の彼の悲劇を予測する伏線ともなっている。しかし、実はこの猛々しさは権力と結びついたところのもので、それを離れた本性は弱小無力な存在にすぎないことが後半部分で詳細に描かれているのである。

窮境に立たされた時、人の本性は自ら表われるものである。『足摺』『有王が島下り』は、そのような状況に置かれた俊寛の心情がリアルに追究されている段である。

絶海の孤島に一人置き去りにされるといふ追いつめられた状況の中で、俊寛が取り得た最後の方法は足摺りである。同じ流人達への歎願は彼等の利己的欲心の前に、既に見捨てられてしまっている。

僧都せん方なさに、渚に上り倒れ伏し、少き者の乳母や母などを慕ふ様に、足摺をして、これ乗せて行け具して

行け……(足摺)

と歎きも露に喚くその姿には、前半で描かれた猛々しさも、又、法勝寺執行として威を誇った面影も既に見られない。

助かりたい欲念の前には、幼児の如き感情発露の法しか持たない人間に過ぎない。事態を打開してゆく程の強さは無い、無力な人間なのである。

「有王が島下り」も俊寛の無力を描いているが、ここで彼は生への執着者として捉えられている。

俊寛の衰弱し変わり果てた姿に、有王は餓鬼道の亡者を思い驚く。孤独と悲惨の中でも来世に救いを求めず、現世の苦しみを受け続ける俊寛なのである。それは容易には断ち得ない生への本能的執着であろう。つまり生自体が、彼の生きる目的であつたと思われるのである。そしてその消極的ともいえる生き方に、又、無力の人としての俊寛をみる事ができるのである。

第二節 『源平盛衰記』の俊寛

大要に於いては『平家物語』と変わりはないが、所々異動がある。

まず前半では次の二点が異なる。一つは鹿ヶ谷事件参画の因に関してである。『平家物語』と同様、祖父以来の猛々しい性格に原因が求められているが、『盛衰記』ではこの他女性問題が新たに付加されている。これは容色は劣るが、心の色の一層深い鶴の前という上童に思いをかけた故、終には謀議に参画したというものである。女性の外面美より内面美を求めたこの描写は、俊寛の情を解する一面とし

て興味の持たれるところである。しかし、後、この女性に
関して全く触れられていないことを考えると、血統説に不
十分さをみた作者の処置であったとも考えられるのである。

次に異なるのは、熊野信仰をしない俊寛に対し、『平家
物語』にみる「天性不信第一の人」のような表現がされて
ないことである。信仰しないのは同じだが、『盛衰記』で
はその正当性を彼自身にとうとうと語らせているのである。
そこに僧としての面目をみる事ができるが、つまりはこ
れも単に言葉上のもので、実際に行動を伴ったものではな
いことが、その直後に引き続き書かれている。

後半の俊寛足摺り、生への執着者としての捉え方は、共
通している。が、『盛衰記』では更に無力な人間として形
象されている。

俊寛足摺りの場を『平家物語』と比較すると、緊迫度に
欠け、本書ではその身の衰れさを歎く沈み切った面が強調
されている。これは、前半の「僧都は強ち歎き疲れて」
（俊寛成経等鬼界島に移す事）と、『平家物語』にはない
描写をもつて付加されているのに照応する。

又、その生への執着振りはより一層のものとなっている。
悲惨な状態に置かれても、平家への聞こえを恐れ、『平家』
でみられた家族の悲報も仏の世界へ入る機縁とはならない。
その最後も有王に善知識された後の、衰弱死なのである。

唯、生きる事が目的の無力の人としての俊寛は、『盛衰
記』でも同様だが、ここでは更に消極的人間となっている
のである。

第三節 謡曲「俊寛」

本作は俊寛足摺りの場のみを収めている。ほぼ『平家物
語』に忠実だが、次の点に異動がみられる。

まず、俊寛が熊野参詣から帰る康頼・成経の為に道迎え
をする趣向が施されている。次に、酒ももとは薬の水とい
う程だから、この谷水もどうして醴酒でない訳があるうか
と、交す言葉にユーモアが感じられる事である。従来の人
間の関係に親近感が窺え、島の生活に穏やかな面が認め
られるようになっていく。

しかし、後半の赦免の選に洩れた事を知つての、俊寛の
歎き・行動には新しい解釈はみられない。やはり、舟に取
り縋り、渚にひれ伏すのみである。窮境に立たされた俊寛
の、赤裸々な感情表出は従来と同様であり、運命の前には
悲歎するだけの俊寛となっている。

以上、三作品に於ける俊寛像をみてきたが、『平家物語』
で窮境に立たされた人間の行動、容易には生を断ち得ない
人間性情にモチーフが置かれ造型された俊寛は、他の二作
品に於いて幾等かの相違が認められるものの、貫流するモ
チーフは受け継がれたと云えるかと思う。

中世という時代の中で、俊寛は運命を悲歎のうちに甘受
するより方法のない無力の人として描かれ続けたといえ、
又、その人間像は時代の中で十分堪え得るものとして、民
衆の間に定着していったことであろう。

このような一つの典型を成す俊寛を素材として、江戸と
いう時代社会を背景に、近松はどのような俊寛像を築き上

げていったのであろうか。次に章を改めて考察してゆきたい。

第二章

第二節 近松の俊寛像

悲惨ともいえる人間性の暗い面を捉えた従来の悲劇を、救われない悲劇と呼べるとするならば、近松の俊寛の悲劇には救いがあるといえるかと思う。それは近松の描いた悲劇が、俊寛の恋知りという豊かな人間性情を基底とし、主体的に選び取った所産と云えるべき性質を持つからである。

本作品で俊寛が登場するのは第二段目切、鬼界が嶋の段である。二の段は教経の温情ある配慮で、一人赦免の選に洩れていた俊寛にも帰洛を許す追加の赦免状が書かれ、又、関所追加の通り切手の二の字の上に一点付け加えられるという、先行作品の悲劇の方法——一人選に洩れる——を全く否定したところの第二段目口、鳥羽の作り道に続いて書き起こされている。

一度は帰洛を許された俊寛が、成経の妻千鳥を乗船させる為、赦免使を殺害した新たな罪で再び島に留まるというのが、その概略である。

二の段が従来の作と趣きを異にするのは、二組の夫婦愛が描かれているからである。一つは成経と島の娘千鳥との若く可憐な愛であり、今一つは、俊寛とその妻あづまやとの間に交わされた夫婦愛である。

成経と海女との交流については既に『盛衰記』に同様の記事がみえており、直接にはこれを踏まえたものと思われる。しかし、『盛衰記』が単にこれを「過性の出来事」として扱っているのに比べ、近松では濃やかな愛情で結ばれた夫婦として描いている点、異なる。この二人の恋は、暗くなりがちな場に明るさをもたらすだけではなく、都を遠く隔て打算なく結ばれたその純粹さの故、俊寛に絶讃される場所となり、彼の悲劇を引き起こす重大な契機ともなるのである。

俊寛とあづまやとの夫婦愛は、実際のな場を伴わず、プラトニックなものとして描かれている。あづまやは初段・四段に登場しているが、初段では清盛から貞操を守る為自害し、又四段では亡霊となってこれを悶死させるという設定の人物である。彼女の一連の行動を支えるものは夫への愛であり、近松はここにあづまやを、俊寛への愛に誠実である女性として造型しているのである。そして俊寛も、このあづまやの愛に十分応え得る人物なのである。

俊寛の新生面としてまず第一に挙げられるのは、彼が男女の情の濃やかなるのを愛する、恋知りの性情を持つ男として造型されている事である。つまり彼自身が、

俊寛も故郷にあづまやと云う女房明け暮れ思ひ慕へば。
というように都に残した妻を恋い慕う、男女の恋を情情的に理解し得る男なのである。それ故、成経・千鳥の噂を聞いては、

僧都莞爾と。かたるも恋聞くも恋。聞きたし聞きたし。

と我が事のように他人の恋を同一視し、やがては、おもしろうて哀れでだてで殊勝でかはい恋。と絶讃の言葉をかける程の人物なのである。

彼の悲劇は乗船を拒否された千鳥の身代わりを決意することに始まるが、それは彼のこの豊かな性情を因とするのである。つまり、彼の犠牲的行為は直接には、

三世のちぎりの女房死なせ。何たのしみに我独り京の月花見たうもなし。

と妻の死を知らされた俊寛の帰洛後の人生に対する絶望感、あづまやへの愛情が基底となっているのである。そして更には「二度の歎きを見せんより」と、危機に立たされた男女の、曾って彼自身が絶讃したところの成経・千鳥の恋愛の破綻を看過できない、恋知りの性情が契機となっているのである。

さて、ここで問題となるのは、千鳥が俊寛の行為を享受するに足る人物かという事である。乗船を拒否された千鳥愁歎場の中に次のような言葉がみえる。

簑むしの様な姿をもとの花の姿にして。せめて一夜添い寝して女子に生れた名聞と。是一つのたのしみぞや。

近世ならずとも女性の潜在的に持つはかない望みであると云えよう。それ故、さきに、欲望を捨て島に留まろうとした流人達に比べ、欲望が満たされず足摺りして歎く千鳥の行為は、決して利己的なものとして観客に映ることはなく、十分同情を払うに値する対象となり得るであろう。それは同時に、彼が一身を犠牲にするに足る対象であることを示

すことにもなるわけである。

この愁歎場で今一つ注意されるのは、足摺りの行為者である。近松は千鳥の行為としてすり変えて使っている。これは第一には、結果的には一人島に残る悲劇が彼の意志になる本段では、俊寛の行為とした場合、終始の折り合いがつかなくなるからであり、第二には、一曲のみせ場として深く親しまれていたのであろう足摺りの場を省略する訳にはゆかなかったからであると考えられる。

第二の俊寛の新生面は、主体性を持った人物として造型されている事である。千鳥への愛情のもとに成経は一旦、島に留まる事を決意するが、これに続いて康頼・俊寛も、いやいや一人残し本意でなし。流人は一ッ致我々も帰るまじと。三人浜辺にどうど座を組み。思ひ定めし其の顔色。

と、流人相互の連帯感の下に抵抗を始めるのである。ここに俊寛は主体的に乗船を拒否し、抵抗という行為を選んでるのである。又、千鳥の悲歎を見ては身代わりを決意し、それを実行に移すに当たっては、瀬尾を殺すという行為に出るのである。

この新たな殺人の罪で彼は従来通り島に留まる事になるのである。が、重要なのは留まった事で、決して取り残されるという性質のものではなかった事である。過去の彼の残留は余儀ないものであり、意思に基づいたところのものではなかった訳である。ところが下って本段の俊寛は、事態に抵抗し島に留まる事を決意し、身代わりという意志実

現の爲、積極的に行動を起こしていったのである。運命に流されず、主体的に事態を打開していったわけである。

最後に赦免使瀬尾について考えてみたい。本来彼は俊寛物語には関与せず、近松が新たに赦免使として設定した人物である。その性情は、「汝が様な不実者」「入道相國お使外の義は存せず」の二語に端的に表われている。彼は一貫した無情な男として、単に悪人清盛を代行するところの分身として位置づけられているのである。

その設定意義としては、次の二点が考えられると思う。第一には、登場人物の複雑化を図ることで筋の展開に起伏を持たせ、劇的緊張感を高める作劇上の一方法である。そして第二には、それ以上に瀬尾を殺すことによつて、これに繋がるところの清盛への復讐を果たす事にあつたということである。

即ち瀬尾は清盛の分身とも云える存在であり、これを殺すことは間接的にせよ、妻を殺された俊寛の清盛への恨みを晴らすことになるわけである。瀬尾の首を刎ねる俊寛の言葉の中には、それまでの瀬尾の理不尽な仕打ちに對する激怒だけでなく、妻を殺された俊寛の復讐の念がまた込められていたと考えられるのである。

以上、鬼界が嶋の段をみてきたが、近松は冒頭で従来の俊寛の悲劇の方法を否定しながら、最後には観客の知識にある場面と合致させるという方法により、彼独自の悲劇を作り上げていったわけである。そしてその悲劇は、中世のそれが受難的であるのに比べ、俊寛自身の意志によるもの

だけに悲惨さは薄れている。やり切れなきの代わりに、若い男女の恋を成就させた事による安堵感が自ら生じてききえするのである。

『平家女護嶋』と云う時代物の中で、近松が描いた俊寛の悲劇は、義理の相剋により生じる「立場の悲劇」ではなく、彼自身の性格に起因するところの「性格悲劇」であつたのである。

結び

各種文芸作品を背景に、近松はどのような彼独自の俊寛像を創造していったのか、本論ではこれを先行作品に於ける俊寛像、近松の俊寛像と二章に分けて考察を進めてきた。中世という時代全般を通じて、彼は運命を悲歎のうちに甘受するより方法のない無力の人として描かれ続けたと云え、又、それは悲惨な生涯を送つた悲劇の人として民衆の間に親しまれ、一つの典型を持つ人間像として定着していったものと考えられる。そのような俊寛を素材に、新しく造型することは容易ではなかつたであろうが、近松はこれを悉知りという豊かな性情を持つ者として、又主体的に行爲する人として造型し、一編の性格悲劇を形成していったわけである。中世的悲劇の人俊寛を、近世的悲劇の人へとその変質を図つたといえるであらう。

中世という時代は、神仏を絶対視すると同時に、人間は弱小無力な存在にすぎないという否定的見方にあつたといえよう。しかし、商業資本の發達に伴う町人階層の台頭という江戸期になると、時代は既に人間の力を信じ、人間性

を肯定する方向に向かって進んでいた。その時代社会の中で、近松は庶民に慰みを提供する浄瑠璃作者として活躍していたのである。

生活欲旺盛な江戸時代であって、民衆が待ち受けていたのは悲愴感漂う中世の俊寛ではなく、もっと人間的感情を激しく掻り立ててくれるところの、夫婦愛・親子愛等しみ

「銀河鉄道の夜」と賢治

——自己統一の過程——

じみとした情愛に満ちた人間俊寛であったと思うのである。そして近松は恋知りという性情を持つ者として、民衆の要望に応え得る俊寛を『平家女護嶋』第二段目に於いて見事に開花させたのである。ここに、観客に慰みを提供してやまなかつた近松の浄瑠璃作者としての偉大さと同時に、人間愛に溢れた近松の人間性に触れる思いがするのである。

二十八回生

田川涼子

目次

一、序論

二、本論

第一章 賢治作品の概説

第一節 詩と童話

第二節 「銀河鉄道の夜」系列

第二章 他著書との比較

第一節 「太陽の都」——命名の問題

第二節 「妙法蓮華経」——求道性

第三章 「銀河鉄道の夜」とは何か

第一節 生の軌跡

第二節 内的過程——自己統一

三、結論

四、注釈

五、参考資料

序論

宮沢賢治の、日本文学史における位置は独自のものである。地方の一詩人、一家として生きた彼の作品は、文壇の大流に染まりきる事なく、一つの芸術性の溜り場として純粹貴重なものである。「職業芸術家は一度亡びねばならぬ」(注1)と言った彼の精神そのままである。

その賢治作品群の中から、私は未完の長編童話「銀河鉄道の夜」を選出し、考察して行こうと思う。賢治独自の芸